

今でも忘れられない。

あの日、カンボジアのアンコールワットで見かけた女の子はこぼれ落ちそうな瞳で私を見つめていた。三歳くらいの小さな子だった。十年以上前のことだから、成長していればもう中高生くらいにはなっているだろう。

女の子の髪の毛はくるとカールし、キューピー人形のような愛らしい顔立ちをしていた。しかし、肌は日焼けと汚れで黒ずんでいる。幼児特有の丸顔とポツコリしたお腹が、彼女に丸みを与え悲壮感を感じさせないが、よく見ると服はボロボロ、足元は裸足だ。もしかしたら、ポツコリ膨れたお腹は栄養失調からきていたのかもしれない。

その出会いはアンコールワット観光、最終日の早朝。すでに四日を過ごし、なんとなくその土地の雰囲気慣れてきた頃だった。私は朝日に照らされる遺跡を眺めようと、夜明け前の薄暗がりの中、カメラを片手に友人とふたりでウロウロと歩いていた。神秘的な写真を狙い、遺跡を囲むお濠のそばでカメラを構えていると、数人の子どもたちがたむろしていた。小学生くらいだろうか。こんな早朝から子どもが遊んでいる？ 少し不思議に思ったが、その時はあまり気にならなかった。

しばらくすると朝日が昇り、周囲が明るくなった。気づくと数メートルほど離れた所に小さな女の子がひとり、こちらをじっと見つめている。驚くほど小さい。こんな小さな子がひとり？ 不思議に思い、近くに大人がいなく見回すが誰もいない。疑問を抱きながらも、あまりの愛らしさに思わずレンズを向けていた。

逃げるわけでもなく、こちらをじっと見つめる瞳。その瞳は無垢だが無表情だ。私はそんな女の子の眼差しに戸惑いを感じつつも、シャッターを切った。しかし、なんとなく不躃なことをしてしまった気がしてカメラをしまう。笑顔で手を振ってみても、女の子は大きな瞳をじっとこちらに向けたまま動かない。歩み寄ろうとすると、小さな体をくると翻しスタスタと駆けていってしまった。

駆けていく方向に目をやると、少し離れた石段の陰に十歳くらいの少女が見えた。薄暗がりの中で見かけた子どもたちの一人だろうか。女の子はその少女と一緒に再び私の近くまで来ると、こちらを気にする風もなく石段を上ったり下りたりして遊び始めた。

姉妹なのだろうか。親はいるのだろうか。帰る家はあるのだろうか。そんなことが気に

なって、友人が別の場所に移動してしまっても、私はその場から動けないままふたりの姿を眺めていた。しばらくすると彼女たちは、そこでの遊びに飽きたのか、またどこかへ駆け出していった。離れていく彼女たちの背中を見送りながら、何もできずに眺めていた自分をなんだか情けなく感じた。

大きな瞳、屈託のない笑顔。旅で出会ったカンボジアの子どもたちは、皆とてもかわいく、無邪気に見えた。自転車に乗っていたり、お店を手伝っていたり、川に飛び込んで水遊びをしていたり。出会った子どもたちの多くは、カメラを向けると笑顔を見せて手を振ってくれた。恥ずかしそうに微笑む子、興味津々でカメラのレンズを覗きこむ子。そんな笑顔に出会うと、経済的に豊かでも幸福感の中で子どもらしく生きているエネルギーを感じることができた。

しかし実際、カンボジアの子どもたちを取り巻く環境は様々だ。社会が経済的に上向いているとはいえ、日本ではほとんどの子どもたちが当たり前に受けられる義務教育を受けられない子もいる。親がいる子といない子では、その未来は大きく違ってしまふのだ。

市場では親の手伝いをする子どもをよく見かけた。大人がいないお店では、年端のいかない子どもが大人顔負けの態度で店番をしていることもある。みやげ物屋で出会った二人の姉妹は、愛らしい笑顔には不釣り合いなしたたかな態度で、私たちの値切り交渉を上手にあしらひ、シルクのスカーフを売りさばいた。

彼らは日本の子どもにはない純朴さを感じさせる反面、大人びた表情も見せる。たった数日だったが、日本の子とは違う経験値を持つカンボジアの子どもたちに、その社会の厳しさと彼らのたくましさを見た気がした。

そして今も思い出すのは、あのアンコール遺跡で出会った女の子たちのことだ。彼女たちには守ってくれる大人はいたのだろうか。遺跡の周辺で遊んでいれば、外国人観光客から何かもらえることもあったろう。もしかしたら、あの時もそんな下心があつて、私の近くで遊んでいたのかもしれない。

しかし彼女たちは、物乞いどころか物欲しそうな態度を見せることはなかった。ただ無邪気に遊んでいたように見えたのは、私が鈍感すぎたのだろうか。いや、そんなことはない。女の子は無邪気に遊んでいた。しかし、自分の置かれている境遇をまだ理解してはいなかったと思う。他者と比べて自分の境遇を嘆くことさえできないほど小さかったのだ。だからこそ、無垢な眼差しを保っていたのだらう。彼女の眼差しは、私を戸惑わせ、強烈な印象を残した。

今、成長した女の子が、どこで、どう暮らしているのかは分からない。その眼差しの先には何があり、今、その瞳には何が映っているのだろう。私が彼女の瞳を忘れられないのは、きつと数年先の瞳に映る未来を予感していたからかもしれない。数年も経てば、彼女の無垢な瞳の輝きは失われていくことを、私は無意識に知っていたのだ。

あの時、私は何もしなかった。「何かできたことはあっただろうか」と、今も時々考える。できたことはあったかもしれない。しかし、しなかった。

今言えることは、女の子との出会いが「今の気持ち」に繋がっていること。だから、これから自分にできることを考えていきたい。まずは「知ること、関わること」だと思う。無関心の鎧を脱ぎ捨て、小さなことから少しずつ関わっていきこう。子どもたちの眼差しの先にある未来のために。